自己制御規範と集団内の立場の違いが個人の態度に及ぼす効果

○山岡重行 (聖徳大学心理・福祉学部)

キーワード: 自己制御規範, 少数派・多数派, 集団意志決定

Effects of the self-regulation norm and the minority / the majority in the group
Shigeyuki YAMAOKA (Faculty of Psychology and Welfare, Seitoku University)
Key Words: self-regulation norm, minority / majority, group decision-making

目 的

山岡(2008)は、個人の行動を制御する規範には個人的自己評価基準である個人規範、所属集団の価値観や評価基準を取り込んだ集団規範、それに自分が生活する社会の規則や価値観を取り込んだ社会規範の3次元があると仮定し、3次元の自己制御規範の顕現性の違いを測定するための3次元自己制御尺度を作成している。集団の合意は規範となり、意思決定に参加した個人の態度に影響する。では、社会規範と集団規範が対立した場合、個人の態度はどちらに影響されるのだろうか。本研究の目的は、集団内での少数派と多数派という立場の違いと3次元の自己制御規範顕現性の個人差の4変数を独立変数として、集団規範と社会規範が食い違う場面での集団意志決定が個人の態度に及ぼす影響を検討することである。

方 法

実験参加者 私立大学2校の18歳～57歳の大学生414名(男性23名,女性391名)。平均年齢19.79歳(SD=3.861)。
実験課題 社会規範と集団規範が対立する事例を作成した。「多くの大学では1年生になるとクラブ・サークルや学科の新入生歓迎コンパなどがその集団の公式な行事として開催される。大学生集団では1年生の飲酒は許容されている。しかし法律では未成年者の飲酒は禁止されている。Aさんは18歳の大学1年生。仲の良い同級生から飲み会に誘われている。自分は未成年だけど、せっかく誘ってくれたのに参加しないと友人たちから付き合いの悪い人と思われるかもしれない。Aさんは飲み会に参加するかどうか迷っている。」自分がこの状況におかれたら問題となる行為をどの程度行うかを、「①飲み会に参加しない、②参加するが自分はお酒を飲まない、③参加して少しだけお酒を飲む、④参加して普通にお酒を飲む、⑤参加してお酒をたくさん飲む」の5段階の評定尺度上で回答させた。その際、「数字が大きくなるにつれてその行為を実行しようという気持ちが強くなる」という注釈を付けた。

手続 実験の1～4週間前に3次元自己制御尺度と態度調査用紙を配布し回答させ回収した。態度調査の回答をもとに事例ごとに実験参加者を3～9名の実験集団に分けた。なお、初期態度の効果と集団内の多数派と少数派の立場の効果を分離するために、各事例で初期態度賛成の者が少数派となる集団と反対の者が少数派になる集団の両方を設定した。初めに課題文の状況について説明し、状況を理解したことを確認してから、問題となる行為をどの程度実行するか個人意志決定1を行わせた。次に実験集団に分け、グループとして問題となる行為をどの程度実行するか集団意志決定を行わせた。その際、多数決をしたりメンバーの意見の平均を出したりしないで、グループで話し合っただけでグループとしての回答を全員一致で出すように教示した。その後、もう一度個人として問題となる行為をどの程度実行するか意志決定(個人意志決定2)を行わせた。この際、集団としての結論を参考にしてもしなくてもどちらでもよいので、現段階での自分個人の判断をするように教示した。

実験は心理学必修の実験実習の時間を利用して実施した。

結 果 と 考 察

個人規範、集団規範、社会規範の3つの自己制御尺度得点の平均点で実験参加者を2分しそれぞれ個人規範制御高群と低群、集団規範制御高群と低群、社会規範制御高群と低群とした。個人意志決定1と個人意志決定2の差の絶対値は集団意志決定の影響を受けた態度変化量の指標となる。これを態度変化量とし本研究の従属変数とし、2(個人規範自己制御:高・低)×2(集団規範自己制御:高・低)×2(社会規範自己制御:高・低)×2(集団内の立場:少数派・多数派)の4要因の分散分析を行った。態度変化量は個人意志決定1と集団意志決定の差により変動すると考えられるために、個人意志決定1と集団意志決定の差の絶対値を共変量とした。集団規範と社会規範の交互作用(F=9.939, df=1/394, p<.01)、個人規範制御と社会規範制御の交互作用傾向(F=3.848, df=1/394, p<.10)と集団規範制御・社会規範制御・集団内立場の3要因交互作用傾向(F=3.680, df=1/394, p<.10)が認められた。集団規範と社会規範の交互作用は集団制御低群では社会制御低群より高群の方が、集団制御高群では社会制御高群より低群の方が態度変化が大きかったことを表す。個人規範制御と社会規範制御の交互作用傾向は個人制御低群では社会制御高群よりも低群の方が、個人制御高群では社会制御低群よりも高群の方が態度変化が大きかったことを示唆する。集団規範制御・社会規範制御・集団内立場の3要因交互作用傾向は、集団規範と社会規範の交互作用は多数派では認められず少数派条件で認められることを示唆する。

社会規範制御高・個人規範制御低群は態度変化量が低かった。自分は最も遵守すべき社会規範に従っているから態度を変化させる必要は無いと判断したと解釈できる。一方、社会規範制御高・個人規範制御高群は態度変化量がある程度高かった。これは集団意志決定過程で社会規範に従うべきという意識が強くなり納得した上で個人としての態度を変化させたと解釈できる。社会規範制御低・個人規範制御高群は態度変化量が低かった。自分の態度にこだわりあまり他者に影響されない個人規範制御高群の特性のためだと解釈できる。社会規範制御低・個人規範制御低群は態度変化量は高かった。個人次元でも社会次元でも自己制御規範の顕現性が低いこの群は自分の態度へのこだわりが低く、集団に同調し合意の方向に態度を変化させていったと解釈できる。集団規範制御と社会規範制御に関して、少数派の場合、社会規範制御高・集団規範制御高群と社会規範制御低・集団規範制御低群は態度変化量が低かった。社会規範自己制御と集団規範自己制御が共に高い群は、自分は社会規範に従った正しい判断をしていると考え同調もしないし態度も変化させなかったと解釈できる。社会規範自己制御と集団規範自己制御が共に低い群は、自分も参加した集団との合意など考慮せず自分の態度を変化させなかったと解釈できる。多数派は同調圧を受けることもなく集団で合意形成を行うことができるが、少数派は多数派との立場の違いを明確に意識しながら合意形成を行わなければならない。そのために少数派条件で集団規範と社会規範の交互作用が認められたのである。